

衆議院議員 小林鷹之からの手紙 vol.20 「日本の未来に向けて」

小林鷹之 対談 小泉進次郎

平成 26 年 9 月 17 日 八千代市民会館
衆議院議員 自民党千葉二区支部 (八千代市・習志野市・千葉市花見川区) 小林鷹之事務所発行 [討議資料]

【小林】進次郎さんに私の選挙区に来て頂くのは3回目ですね。今日は、私たち30代の政治家が直面する諸課題にどう向き合うべきなのかを議論していきたいと思います。まずは復興です。進次郎さんの単にマイナスをゼロに戻すというよりも、新しい発想でプラスαを生み出すのだという視点を強く感じます。特に、来春、福島県広野町で開校する中高一貫校「ふたば未来学園高校」について尽力された思いをお聞かせ下さい。

【小泉】そもそも真の復興って何でしょうか。震災直後に、大船渡市の避難所で会った9歳のおじいちゃんの話が強烈に残っています。「私は全部失った。家も、息子も孫も津波で失った。でも小泉さんが

来てくれて、日本中からも世界中からも支援を頂いた。中には日本といがみあっている国からも支援をもらった。これが世界平和に繋がるなら、災い転じて福となすですね」と。衝撃を受けました。息子さん、お孫さんを亡くした方が語った言葉が世界平和ですよ。それ以来定期的に会っているその方から、3年経った今年の3月「もう俺の復興は終わったよ」と言われたのです。一人で新幹線に乗って、リュックに入れた息子さんとお孫さんの喉仏の骨を西本願寺に納め、供養して

頂いて、そう思ったとのことでした。聞きながら涙が流れました。3年半被災地を回って家族や家を失った人が面と向かって「もう復興は終わった」と言ってくれたのはその方が初めてでした。復興の意味を考えさせられました。一人一人復興の意味が違う。「これが復興だ」と国が決めてはいけないと思った。そこで私は、将来そこに住む一人一人が自分たちの街を自分たちで作ろうと思わないと真の復興はないと思い至りました。「人の復興」、すなわち「教





育の復興」だと。

そこで、原発事故で避難を強いられた福島県に「ふたば未来学園高校」を開校します。

様々な人の協力を仰いで教育復興応援団を作りました。校歌を作ってくれる秋元康さん、「今でしょ」の林修さん、

在学中に留学したいという子供達の思いを実現するためにマサチューセッツ工科大学メディアラボ所長の伊藤穰一さん、そして宇宙飛行士の山崎直子さん。宇宙飛行士は放射線を1日1mSv浴びている。国の基準は1年に1mSvです。その実体験に基づく宇宙の話をしなから放射線教育をして頂く。前例のない環境に置かれてい

るからこそ、前例のない教育、

今までにない学校創りです。最後は「人の復興」だと思っ

【小林】進次郎さんが多くの現場で一人一人と向き合い、自然に抱いた感情が発露したお話ですね。被災地に行き、

その未来を担う子供達の可能性を育むことを通じて地域の可能性を育んでいく。そんな息の長い本物の復興プロセスこそ我々の世代がサポートしていかなければなりません。そして、人それぞれ復興に対する捉え方は違います。去年8月に進次郎さんと一緒に千葉県旭市に行った時に、「時間の経過と共に私たちの存在は忘

れ去られていく。風化との戦いだ」との被災者の言葉が胸に突き刺さりました。今日のこの会が、一人ひとりが復興について考える良い機会になればと思います。

さて、日本の未来

を語る中で避けて通れないのが「経済」です。地元の八千代市、習志野市、千葉市花見川区は、いわゆる首都圏の

ベッドタウン。東京の大企業に勤める一部の方からは「景気が良くなってきた」との声

も聞きますが、地元経済を支えている中小企業の経営者や商店街の店主の方と話す、「一体アベノミクスはどこへ行ったんだ？」と。景気回復の実感を抱いている方は殆どいないというのが私の肌感覚です。東京から30km圏の場所でもこんな感じですが、進次郎さんは地方創生担当政務官としてどう考えていますか？

【小泉】「地方創生」が出てきた発端は人口減少に加えて、今小林さんが話されたアベノミクスが地方まで浸透していないという点です。

まずは各自自治体が自覚を持つ

て頑張っているのを見ないといけないと思います。田中角栄さんの「均衡ある国土の

発展」は均衡してお金を配れたからできましたが、今はもう無理です。最近石破大臣も、「やる気があつて頑張っているところは応援する。ただ知恵も出さない、やる気も見えないところは「めんなさい」と言っています。

国が用意している補助金のメニューを知らない自治体がたくさんある。東北の被災地では、自治体の首長の参謀役として多くの若手官僚が被災地の小さな市町村の副首長という形で入っていて、自分たちの街づくりの中で使えるメニューをしっかりと活用してもらっています。やる気があつて手を挙げた自治体には若手の

優秀な官僚を送り込んで行くとも考えています。あと大事なのは「連携」です。横須賀もそうですが、工業団地の中で、隣の工場で何をやっているのか知らない人たちが大勢います。東京大田区の町工場の皆と一緒に世界一のボブスレーを作ろうとした。その副産物として、初めて隣の町工場が何やっているのかがわかってきたそうです。地元の人たちがお互いに何をやっているのかを共有して横の連携も増やしなが

ら、頑張っている人達の背中を後押しする動きをやらな





けない。すぐに結果は出まさんが、5年、10年先を考えながら地方の足腰を強くするためにやっていきたいです。

【小林】各自自治体の自助努力が求められるという点は本当にその通りです。努力なくして「税収が足りないから国の財政支援をよろしく」という姿勢はもはや通用しません。「おらが町の強みは何なの

か？」各自自治体が真剣に考えて、地方創生を言葉だけで終わらせないようにする必要があります。例えば、この八千代市もいくつか切り口があると思うんです。まずは人口です。2040年の人口推計を見ると、特に若年の女性人口は県内の全自治体で減少しますが、その減少率が県内で最も軽微なのが実は八千代市。つまり、

子供の人口比率が県内で相対的に高まる可能性が高い。私も4歳の娘と一緒に寝ていますが、寝顔を見るだけで親は癒される。そんな力を秘めた子供たちの数というの大きな強みですよ。次に公団住宅の存在です。隣の習志野市の袖ヶ浦、大久保団地や花見川団地もそうですが、八千代市内にも米本、村上、高津団地という大きな公団

住宅が集中しています。いずれも高齢化、空き室の増加、団地内商店街の疲弊といった共通の課題を抱えています。僕たちの世代に求められているのは、こうした課題をただ嘆くことではなく、課題を逆手にとってチャンスに変えていくことですよね。「住宅団地発祥の地」とされる八千代市が、医療・介護施設と連携した次世代型の公団住宅のモデルを全国に示していく。

メッセージ性は十分あると思いますよ。

【小泉】そうですね。徳島県の神山町という過疎化が進む山里があります。ここでは町の将来にとって必要な職種を住民が「逆指名」していくという形で活性化していくという事例も出てきています。

【小林】発想の転換ですね。面白い発想という意味では、この八千代市を拠点に世界と勝負する企業もあるんですよ。セブンイレブンの100円アイスコーヒー。この氷を作っ



した発想や決断を後押しする環境を地元を整えていきたいですね。次に外交です。進次郎さんも米国での勤務経験があります。私には世界の中で日本がどう見られているのかを痛感させられた期間でした。政治、経済、軍事等、あらゆる面で日本を取り巻く国際情勢

ているのは地元の製氷会社です。40年前に冷蔵庫が普及して氷が売れなくなった。そこで社長が思いついたのが「割った氷」、いわゆるロックアイスです。これがヒット。国政で「イノベーション（技術革新）」を議論するととてもない仕掛けが必要に思えますが、ちょっとした発想とそこに賭ける決断が素晴らしいビジネスチャンスを生み出せる。後から振り返ると「何だ、そんなことか」と思うかもしれません。これも立派なイノベーションです。こう

が急激に変わってきています。また、進次郎さんの地元横須賀には海上自衛隊と米海軍基地が、私の地元は陸上自衛隊第一空挺団を擁する習志野駐屯地に隣接する中で、日本の安全保障について意識せざるを得ない環境にあります。これから国際社会に対して日本がどういうスタンスで向き合っていくかと思いませんか？

【小泉】「世界の中の日本」という視野をどこまで共有できるかということに日本の将来がかかっていると思います。まずは、誇りと自信を持つべ

きです。日本は世界第3位の経済大国。国連だって、日本が払っている分担当がなければ動かない。日本は世界に対して多大な貢献をしています。私がアメリカに行こうと思っただけの一つは、子供の頃親父が「日本のことを知りたいなら、日本にいては分からないぞ」と言っていたことです。今はその意味がよくわかります。中から見る日本と外から見る日本は違う。こんなに便利で安全で素晴らしい国なのに、何故日本人は自分の国に自信を持たないのか。一番強い思いはそこです。私や小林さんのように海外で教育や勤務の機会を頂いた人間はその責任を果たさないとけない。

【小林】最近、アドビという企業が日米英独仏の5か国を対象に行った調査によると、日本人は世界から「最も創造力がある」と評価されながら、自分の創造力に対しては「最も自信がない」との結果。もっと

と自信を持つべきです。外交も然り。一方的に譲歩して課題を回避する「事なかれ主義外交」では逆に国際社会からの信頼を失います。「沈黙は金」は世界では通用しない。外交は、課題の回避ではなく課題の克服のために行うものです。自らの見解を思い切りぶついても壊れることのない信頼関係を相手国との間で醸成することが本質です。これも我々世代が率先して果たしていくべき責任だと思えます。

【小泉】2020年には東京オリンピック・パラリンピックが控えています。後世から見ると、これを契機に日本の新しい国造りが始まった、と言われるくらいにしていかなければなりません。特に私や小林さんのように、2020年以降の方が大変な時代が来るぞという危機感を持っていて人間は、訴えていかなければならないことも多いと思っています。

【小林】そうですね。そして現在、日本は4人に1人が高齢者ですが、韓国は2030年に中国も2040年に同じ状況になります。どの国も経験したことがない少子高齢化に向き合う私達がどのような新しい発展のモデルを示していけるのか、これこそ日本が世界に対してできる最大の貢献だと思います。世界のフロンティアとしての気概を持って一緒に頑張りましょう。最後に、私たち若い世代の政治家が果たすべき責任についてどう考えますか？

【小泉】私たちの世代は、親や祖父母の世代ほどの豊かさや味わうことができないかもしれませぬ。その次の世代がより豊かな社会を生き抜くために全力を尽くそう、むしろ目の前の多くの課題を解決していくことにやりがいを感じる世代だと思えます。私は今、お金を稼ぐことより世の中の課題をどうやったら解決できるか、役に立ちたいという実感を大切にしている若者が増えていくことが希望だと思っています。その若者が活躍できる環境整備を私たちの世代でやらなければならぬ。若い人たちにツケを回すことなく、私たちが払うものはしっかりと払っていく。それが私や小林さんに課された大きな責任だと思っています。共に頑張っていきましょう。

【小林】全く同感です。僕たちは、今自分達がしたことが20年、30年後にどのような成果となって現れるのか、恐らく生きていく間に次の世代によって検証される世代です。そういうプレッシャーを感じながら、やりがいを持って一緒に国造りに携わっていきましょう。八千代の美味しい梨を後で「ご賞味くださいね(笑)」。

※実際の対談内容を適宜要約しています。

